

21世紀の認知神経リハビリテーション —行為のリアリティとアクチュアリティの回復を目指す—

認知神経リハビリテーション学会
会長 宮本省三（高知医療学院）

精神科医の木村敏によれば、人間の認識には「クリティカ」と「トピカ」がある。クリティカは世界の部分を個別感覚(五感:視覚, 聴覚, 嗅覚, 味覚, 触覚)によって分析的に捉える方法であり, トピカは世界の全体を共通感覚(common sense:五感に共通する感覚)によって全体的に捉える方法である。

その上で、木村は、「現実」を「リアリティ(reality)」と「アクチュアリティ(actuality)」に区別している。リアリティは私たちが個別感覚によって認知し、主としてクリティカによって判断しているような現実であり、アクチュアリティは共通感覚によって「身をもって」経験し、トピカを働かせてその生命的・実践的な意味をキャッチしているような現実である(木村敏:心の病理を考える.岩波書店,1994)。

また、近年、この現実の二重性(物質と生命)については『川瀬雅也:生の現象学とは何か:ミッシェル・アンリと木村敏のクロスオーバー,法政大学出版,2019』で論議されているが、勝手な個人的な見解として、リアリティは物質的、客観的、三人称的な「認知」に根ざした現実(認知によって新たな行為が創発するという捉え方)、アクチュアリティは生命的、主観的、一人称的な「行為」に根ざした現実(行為によって新たな認知が創発するという捉え方)と解釈できるかも知れないと考えている。

木村は、離人症における自我の喪失感(身体性の変容感、自己所属感の消失、時空間体験の異常、意味の喪失など)を、「リアリティとアクチュアリティの乖離」と考えた。また、それは片麻痺患者にも身体所有感や運動主体感の変容として出現する。

本講演では、片麻痺患者の行為のリアリティとアクチュアリティについて考えてみたい。片麻痺患者の行為のリアリティは現在である。この現在が「過去(行為の記憶)」や「未来(行為の予期)」と比較できるようになると、行為はアクチュアリティへと回復するだろう。

行為の回復のために、21世紀の認知神経リハビリテーションは歩みを止めてはならない。